



日口交流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会
E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



美しすぎた白銀のロシアー第17回日本文化交流団

笠原 以津子

黄金のロシアに続き、白銀のリャザン、サラトフでの日露文化交流。感動を沢山頂きました。抜粋してお話致します。

●「盲学校寄宿舎訪問」

3～20歳180名に対し職員が150名、まずその体制に驚きました。子供達の真剣な実技、合気道の先生の優しい声に涙が出て見ていられなくなりました。平和ボケ故に不平不満を垂れている自分はいったい何？訪問の機会を与えて下さって感謝します。色んな事を教えてくれてありがとう！一生懸命する事も教えてくれてありがとう！

●「寝台車の粉だらけの手のおばあちゃん」

リャザン～サラトフ間は12時間寝台車で移動。結構ハードな日々だったのでぐっすり眠れた翌朝、お茶を飲みたくて皆で食堂車に行きました。席で見たメニューの多さにびっくり。その後、私はどうやってこれらの料理を作るのか興味深々でちょっと奥を覗き見。簡単な厨房でおばあちゃんが手で何か捏ねていたのです。30分程して、粉まみれの手で持ったお盆に乗せて運ばれたのは、チーズ入りのパン(?)。日本だったらレンチンなのに・・・感激！美味しさにも感激！

車窓の、太陽でダイヤモンドのように輝く眩しい雪景色にも感激！！ずっとここに居たいけど、さてそろそろ仕度をしましょうと席に戻ると車掌さんが「あと10分でサラトフですよ」と。皆、時差が1時間ある事を忘れ大慌て。慌てて降りたホームにはマリナさん初め、皆様が笑顔で迎えに来て下さって、また感激！！

●「Radischev Art Museum」

サラトフでのちぎり絵と友禅の講習会はこちらの美術館で行いました。ワークショップの後、美術館を見学をし、また感激。「この絵の作者は、この美術館に飾りたいと思い絵を始めた方です」そういう事が可能なのね？私も夢や目標をずっとずっと持ち続けたい！

●「お洒落なロシア人」

バレエを観せて頂きました。バレエは勿論、舞台美術、劇場の建築の素晴らしさに感激！そして観客のオシャレ度に惚れ惚れ。日本人がよく言ってます、「着ていく所がないのよね」と。今は銀座もホテルのディナーもカジュアル化。私も「着ていく所がない」でなくて、いつもオシャレで居たいと思いました。まずは大好きだけど履けないハイヒールから早速挑戦♪

・・・水曜日の夕方、神谷町の階段でこけている人を見たら私だと思って笑ってやってください。

●「日本の技」

よく聞かれる「これからの伝統工芸について」。「伝統を残



活け花講習会の様子

しながら今の時代に合わせていく」100人職人が居たら100人がそう答えます。私もそう答えてきました。でも最近、難しく考えず、シンプルでいいわと思うのです。



インタビューを受ける筆者

2回に渡り、お手伝いしたり目の前で見てきた茶道、和裁、生花、剣術、風呂敷・・・とてもシンプルな美しさを感じました。長い歴史を引き継ぎ、しっかりした土台があり、そこにその人のセンスが加わり、長年の技がそこに自然に美を生みシンプルに、こじつけず、造り固めず・・・そして、芯棒には「真心」と「愛」がある・・・私もそうありたい。

●「最後に」

今回も沢山感動をし、大変有意義な日々を送ってまいりました。自分を、友禅を、俯瞰もでき・・・日本とロシアは絶対に心で繋がっていると実感しそんな機会を下さった事に本当に感謝いたします。単なる一職人が、こうして海外で実演やワークショップが出来るというのはとても凄いことなのです。

「生きてて良かった。友禅を続けてきて良かった！」決して大袈裟ではなく、そう思います。気持ちの伝え方が見つからず、こちらの言葉しか思い浮かびません。『皆様、本当にありがとうございました。』

お知らせ

●第58回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2019年2月17日(日) 13:00～16:00

講師：菅野エレナ

場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室
会費：3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

●第10回テーマ別ロシア語「AV教室編」続編

日時：2月3日(日) 13:00～16:00

場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」学習室D2

費用：会員3,000円、一般4,000円

講師：オクサーナ・ピスクノワ

●第3回夏季ロシア語現地学習会説明会

日時：2019年2月24日(日) 13:30～15:30

会場：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」学習室D1

参加費：無料

＊ハバロフスクは東京から2時間。現地の大学の授業を短期間で安く受講し、観光も楽しめる3倍お得な学習会。説明会では、体験談も聞けて質問もできます。

＊お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel : 03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



1 月 場 所 相 撲 観 戦 交 流

千葉 麻里

今年も1月の土曜日に、ロシア大使館の方々と両国国技館で相撲観戦をしました。大使館からは34名、会員が6名。団体で、一般販売より先行して申し込むことができます。相撲は人気が高く、後ろの椅子席は外国人の団体客でいっぱいでした。英語やらドイツ語が飛び交い、見るからにお互いに日本人ではないが、どこから来たのだろう、と顔を見合わせたりしていました。稀勢の里引退の翌々日でしたが、会場はいつも通り満員御礼。3時を過ぎると椅子が埋まり始め、応援が賑やかになり熱気に溢れてきます。

大使館からは顔見知りの方も多く、時々、後ろを振り返って質問されます。「あの旗は何か」「旗が多いのはどうしてか」「あのダンス（土俵入り）はどういう意味か」「何を投げているのか（塩）」「あの着物姿は審判なのか」等々。升席に芸者さんが数人いて、また「どこから来たか」「普段、何をしているか」「どこで見ることができるか」と、興味があちこちに移ります。相撲のほうは知識が少ないので冷や冷やししながら答えていました。時々、隣のラファエルさんや山岸さん、坂本さんに助けを求めながら何とか乗り切りました。そうこうするうちに、5時過ぎに中村泰弘さんが、ロシア語の番付表と簡単な説明の入ったコピーを持ってきてくれたのでほっと一息。

ジョージアやブルガリアの力士の戦いぶりを見たかったのに、不戦勝になってたりで少し残念でした。会場内の博物館

で購入したらしい栃ノ心の写真を持っていて、彼はいつ戦うのか聞かれましたが、こちらでも怪我で休まっていたいました。

ロシアの方は小さな子どもでも大

人しく座って見えています。しかし、オペラなどとは違い、食べながら観戦できるのでなおさら楽しいようです。早いうちは博物館などを見て周り、グッズや食べ物などを買っていたようすでした。それから、珍しい会場の様子をスマホで写真に撮ったり、競技の様子をビデオに収めたり。

普段、あまり相撲に関心がないのですが、日本の最古の国技として少し勉強しておかなければいけないと思いました。相撲界のゴタゴタがあるのは残念ですが、その人気は海外でも変わりません。急に日本へ行くことになったので、相撲のチケットを手に入れて欲しい、と言われたことも何度かあります。力士が国籍を問わず活躍しているのも魅力的なのでしょう。

大使館での日本語の授業のときに、5月場所も見たい、と今から希望している方々の声を聞きました。（常任理事）



ロ シ ア 料 理 は 美 味 な り や ？

大原 翔

インスタント・ラーメンを発明した関西の企業家の奮闘の様子が、毎朝、NHKテレビの連続ドラマで流されている。ユーモラスな内容で毎回興味深く見ている。インスタント・ラーメンは、昭和という時代に日本で発明され世界に広まった革命的な食品の一つであろう。

以前、私はロシアへ出張のスーツケースに、大量のカップ・ラーメンを詰めて行っていた。成田空港の飛行機のチェックインカウンターで、超過荷物にならぬかいつも気が気でなかった。いつ頃からであろう、ロシア出張にインスタント・ラーメンを持参しなくなって久しい。

何故もっていかなかったのか。色々の要因がある。古い話で恐縮ながら、ソ連時代モスクワなど大都市であってもレストランの数が少なかったということもある。席を事前に予約する必要があり、面倒であった。テーブルにたどりついて、サーブに時間がかかる場合が多い。早く持って来ると、ボーイさんをせかしても「シチャース」と（文字通りの元の意味は、1時間以内か？）の繰り返しで、らちが明かない。時間がかかってしょうがない。

諸先輩からよく聞いたことは、当時モスクワのウクライナ・ホテルで日本の駐在員が注文するのは、ボルシチ、ツウイブリャータ・タバカー（若鶏を丸ごと開いてプレスし焼いたもの）、ジュリアン（きのこいりミニグラタン）の定番3つくらい。それくらいが日本人の口にならぬものだった。由。現地のロシア料理レストランに入るやいなや、厨房から何かバターかなにかの熱した強烈な匂いがして、パヴロフの条件反射のごとく、瞬時に食欲を無くす邦人も少なからずい

た。

端的に言えば、上述のような状況が今日のロシアでは大幅に改善されたがゆえに、スーツケースにかさばるインスタント・ラーメンを詰め込まなくとも済むことになったと言える。私自身は食事には保守的で、子供のころより慣れた和食を好む傾向が強い。換言すれば、ライスつまり米のご飯があればなんとかなる（なければ困る）。

日本の若い留学生の方々とモスクワやサンクト・ペテルブルクで懇談する機会が、最近あった。ロシアでの生活について話が及んだときに、「食事は大丈夫ですか」と聞いてみた。「ロシア料理はどうも・・・」という答えを当方は、半分期待していたのだが、彼らは「ロシア料理はおいしいです！」と異口同音に即答された。時代が変わったのを感じさせられる。ロシアも変わったが、日本も変化している。

江戸時代末期や明治の初期に日本から欧米視察団が派遣されている。使節団一行が外国ではじめて遭遇する西洋料理への反応はどうであったかに興味がそそられる。私は、使節団の滞在報告などの本を不勉強であまり読んでいない。種々興味深い内容が書かれていることであろう。岩倉使節団などはロシアのサンクト・ペテルクに2週間滞在している。果たして、彼らは、ロシア料理を美味いと評価したのかどうか・・・。当時のロシアからの最高のおもてなしとは言え、各人の味覚は様々であろう。つまるところは、有名なことわざにあるようにHunger is the best sauce.（空腹は最良の調味料なり）ということになるのかも知れない。（2019年1月20日記）

CAMAPA -初めてのロシア訪問

藤本 信義

zozotown の前澤氏の宇宙旅行切符の購入が話題となったように、宇宙観光の足音が近づいてきている。かつては宇宙ほどに？アクセスが大変だった旧ソ連の閉鎖都市サマーラが私の初めてのロシア訪問の地だ。もともとは冷戦の中、米ソの競争によって加速された東西それぞれの有人宇宙基地計画ミールとフリーダム。それが冷戦の終結とともに国際宇宙ステーション (ISS, Международная космическая станция МКС) という名前ですべてとなり、日本もロシアとの宇宙協力的一端を担うことになった。ロシアとの協力経験など皆無のなか、20 世紀の終わりに手探りで始まった協力プログラムで初めて訪れた都市がサマーラだったのは、たぶん幸運だったと思う。ボルガ川に臨み、ロシアの中では南国の太陽が降り注ぐこの街は明るく、人々は陽気で、仕事の後のひと時に川での水泳や、パーティを楽しみ、人懐こく親切だったから。案内してくれたシャラポワ似のオリガさんのロシア式のハグは、アメリカのものとも欧州のものとも違い、その温もりが 20 年近く経った今でも感觸の記憶として残っている。ソ連崩壊の余波がまだ続き、暗く苦しい雰囲気 Moskva がもし最初の訪問地 (もちろん出入りはシェレメティボなのでモスクワは通過したのだが) だったら、ロシアに対する第一印象はかなり違ったものになり、この原稿を書くこともなかったかもしれない。

現在、ISS に宇宙飛行士を運んでいるのはロシアのソユーズロケットだ。このロケットはガガーリンを宇宙に運んだボス



トークロケットの頃から設計を共有している。サマーラにはソユーズロケットの製造工場があり、最盛期には年間 60 機もの製造を誇っていたとのこと。この街で製造されたロケットは、パイコヌール、プレセツク、ボストーチヌイといったロシア各地の打ち上げ場から宇宙に飛び立つ。有人宇宙船ソユーズを搭載すれば、3 人の飛行士を宇宙に打ち上げることができ、無人輸送機プログレスや、人工衛星を搭載すれば無人の打ち上げロケットになる。世界で最もフレキシブルな打ち上げ用ロケットだ。

よく知られているように、世界で一番始めに実用化されたロケットは V2 号、大戦末期の兵器である。宇宙ロケットとミサイルは技術的にはとても近い。だが長年携わってきて確信したのは、ロケット打ち上げは見る人を幸せにする力があるということだ。だからロケットを作るサマーラは幸せの元を作っているということ。また、サマーラは J A J A の製造拠点でもある。素朴で力強い J A J A と C o y o 3、共通する工業製品がこの街で作られているのは興味深い。日本でもロケットの名古屋と車の豊田が隣接しているが、IT 全盛の世界でも、製造の街に活気があるのは良いことだ。観光地ではないサマーラだが、ぜひ一度は尋ねてみることをお勧めしたい。

参考) コラム：宇宙開発の現場から
<http://iss.jaxa.jp/column/station/vol08.html>

リャザンへようこそ！(2) 土井 法子

【リャザン大学の日本語教育の様子】

次はリャザン大学についてご紹介したいと思います。リャザン大学は 1915 年に建てられ 100 年以上の歴史のある大学です。リャザン市内に複数の校舎があります。日本語教育は 2000 年から始まり、外国語学部東洋言語学科や教育学部で教えられています。大学では主専攻・副専攻の学生を含め、毎年 60 名前後の学生が日本語を勉強しています。また授業を担当しているロシア人教師は 3 人、日本人教師は 2 人います。

授業は基本的な日本語の授業だけでなく、日本文化や日本史の授業もあります。教科書は、初級日本語として有名な『みんなの日本語』や会話練習に便利な『まるごと』、さらにそれぞれのレベルや学習内容に合わせたものが使われています。

また、今年は日本から 2 人の留学生がリャザン大学へロシア語を勉強しにきています。リャザン大学では国際的なフォーラムや行事がたくさんあります。定期的に各国留学生による文化的イベントも多く開催されるため、日本人の留学生も色々なイベントにひっぱりだこです。また日本語学科の学生とも仲が良く、授業に参加してもらうこともあります。日本人の少ないリャザンの町にとって日本人留学生は大きな存在で、日本語を専攻している学生の日本語学習へのモチベーションにもつながっているようです。

リャザン大学では日本文化に関するイベントも年に数回開催されます。昨年は日本映画祭が、今年の 11 月には落語家による寄席がありました。また、毎年 5 月中旬には日本語弁論大会



と日本文化祭があります。弁論大会は毎年 10 名以上の出場参加者があり、優勝者には千葉にある日本語学校から協賛していただき一ヶ月短期留学券が贈られます。日本文化祭は一般公開され、大学内だけでなくリャザン市内から大勢の人にお越しいただいています。文化祭では 6 つほどのセクションに分かれて学生と教員が、書道・茶道・生け花・折り紙・カラオケ・日本食などの日本文化を紹介しています。

さらに、2018 年はロシアにおける日本年ということもあり日本文化に関するイベントやセミナーが数多く行われました。11 月には日口交流協会の先生方を中心にリャザンにお越しいただき、日本文化に関する講座を開いていただきました。どの講座も熱心に教えていただき、とても興味深いものばかりでした。リャザンのような日本人の少ない地域では日常的に「日本」に触れる機会が多くはないので、このような講座やイベントはとても勉強になり、学生にとっても良い刺激になりました。この場をお借りして日口交流協会のみなさまに感謝申し上げます。

最後になりますが、リャザン大学では日本人留学生を受け入れています。また、リャザンはモスクワからも日帰りが可能(ロシアでは) 近い距離にあります。是非ロシアへお越しの際にはリャザンへ足を運んでみてはいかがでしょうか。(日露青年交流センター派遣、リャザン国立大学日本語教師)

参考 : <https://ja-jp.facebook.com/ryazan.jp/>

モスクワ「ムゼイ」巡り・その14

モスクワ考古学博物館
Музей археологии Москвы

大矢 温

観光客でごった返す赤の広場の入り口、フォーシーズンズ・ホテル（旧ホテル・モスクワ）の巨大な建物に寄り添うように、小さな建物が建っている。近づいて中をのぞけば、一本の階段が地下へと続いている。この、まるで地下鉄の入り口のような建物がモスクワ考古学博物館の入り口だ。博物館自体は丸ごと地下にある。地上にあるのはこの入り口だけだ。もともとこの博物館、ソヴィエト崩壊後の1993年から始まったマネージ広場の地下街（現オホートヌィリャド地下街）建設に深い縁がある。地下街建築に伴ってここを掘り始めたところ、地下から貴重な歴史的遺物が続々と発掘されたのだ。それも当然、このマネージ広場、もともとはクレムリンの門前町だった地区で、ここの街並みも幾多の一揆や動乱、戦争や革命によって地表から何度となく一掃されてきた過去を持つ。かくして主を失った遺物はそのまま地下で眠り続けていた、というわけ。1997年にオープンした地下博物館だったのだが、長い間、修理中で閉館されていた。それが2015年に再オープンした。

博物館はこの地区が16世紀、当時クレムリンの堀を兼ねたネグリンカ川沿いの木造集落だったころのレベルまで掘り下げて作られている。館内には、木道や建物の基礎など当時の

ままの状態で展示されている。中でも見ものはヴァスクレースヌィ橋。博物館の天井を支える梁のようでもあるが、地下に埋まったままの状態で見られている17世紀の橋である。もともとこの橋、ネグリンカ川をまたいで赤の広場へと入るモスクワの表玄関の橋だったが19世紀初めのナポレオンのモスクワ侵攻のあと、ネグリンカ川が暗渠化されたのに伴って使われなくなり、そのまま地下に埋まってしまったのだ。ここで発掘された土器やガラス器、古銭やアクセサリ類のほか、モスクワ近郊で発掘された遺物も展示されている。場所も赤の広場の真ん前なので、モスクワ観光の折にちょっと立ち寄ることをお勧めする。

見落としてしまいそうな入り口



（札幌大学地域共創学群教授）

＊入場料 大人300ルーブリ

＊最寄駅は地下鉄 オホートヌィリャド Охотный рядまたは
テアトラリナヤ Театральная
(<https://goo.gl/maps/SmxyZW7Ja5Q2>)



「唐人の根っこ」を見に田子の浦へ

倉田 有佳

昨年12月、「ディアナ号がやってきた！～日本人とロシア人に生まれた心の絆～」（加藤昭夫、中村勝芳、静岡県立吉原高等学校「世界の子どもの心を繋ぐ物語を作る会」著、2010年富士市日口友好協会発行）という露訳付きの絵本をいただいた。舞台は、今から164年前の宮島村（現静岡県富士市）だ。日露交渉の全権代表プチャーチン提督一行は下田で大地震に遭遇し、乗って来た「ディアナ号」は被災。船の修理のため戸田（現沼津市）に向かうが、途中で沈没しそうになる。500名ものロシア人の命、そして船の荷物を陸へ運ぶのを助けたのが宮島村の人たちだった。村人自身、地震で家を失った被災者だったが、暖を取らせるために砂浜に焚火を用意し、衣服や食べ物を提供した。

「田子の浦」と聞くと、静岡県生まれの筆者などは、「大昭和製紙のヘドロ」を思い出すが、この地の人々の暮らしを支えてきたのは沿岸漁業だ。宮島を発った「ディアナ号」は戸田へ移送される途中、駿河湾で沈没。船と共に海底に沈んだ錨は、漁網にひっかかる障害物となった。地元では「唐人の根っこ」と呼ばれ、100年もの間漁師を苦しめることになる。絵本は美談だけでなく、こうした負の遺産も伝えている。

1954年、地元漁師たちによって「唐人の根っこ」は引き揚げら

れた。これが「どでかい錨」（錨1号）であることは判明したが、「ディアナ号」の錨」とまでは特定されなかった。費用は県の補助金（「シラス漁の障害物除去」）が充てられた。

さらに20年後、大地震や富士山爆発の噂、それらに対する地元行政の対策が検討される中、安政の大地震やディアナ号遭難事件に市民の注目が集まる。船体の発見も期待されつつ、富士市から漁協への補助金「海中の障害物の除去」で海底探査が行われた。船は発見できなかったが、二つ目となる錨（2号）と錨をつなぐ鎖が引き揚げられた。

絵本に刺激され、昨年の暮れ、新幹線の新富士駅で下車した。駅から南に5分ほど歩くと、「宮島」という地名が現れた。海はまだ遠い。穏やかな陽光を全身に浴びながら歩くこと20分。幹線道路の反対側に「三四軒屋緑地公園」を見つけた。「唐人の根っこ」錨（2号）と鎖、そしてプチャーチン像（1メートル30センチの全身像）があった。像は、錨（1号）を譲渡された戸田村が富士市に寄贈したものだ。

海を見るため緑地帯を先に進むと、砂地と松林が現れた。だが海は見えない。巨大な防潮堤が邪魔しているのだ。日口の心の絆を育んだ「海から続く広い砂浜」。この風景は絵本の中に残された。（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

お願い

NP0 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を行っています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。
振込先：郵便口座 00160-9-66486、加入者：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 E-Mail : nichiro@nichiro.org
＊横山宣彦氏、朝妻幸雄氏からご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。

